

## 駒木敏先生を送る辞

一九七九年四月の専任講師ご着任から三〇余年の長きにわたって、同志社大学で教鞭を執ってこられた駒木敏先生が、二〇一三年三月、ご退職の時を迎えられる。まことに僭越ながら、本学でご一緒させていただいた同僚の一人として心からお礼の言葉を申し上げたい。

先生は、古代歌謡や万葉和歌を中心に緻密な研究を重ねてこられた。歌謡には（歌謡に限らず文学作品には、と言ってもよいであろうが、特に歌謡のような韻文作品には）、当然ながら、表現（意義）と形式（音韻や構成）の両面があるけれども、そのバランスをうまくとりつつ、偏りのない姿勢で作品に向き合うことは、実はとても難しい。ややもすれば、無味乾燥な機械的なものになりがちな歌体や音数律の論も、先生の手にかかると、歌の場や表現の論理と絡み合いながら、生き生きと展開される。だからこそ、表現と形式二面の間にあるような、枕詞・序詞といった修辭的側面についても精緻に論じられ、その変容のさまを鮮やかに浮かび上がらせることが可能になるのである。歌謡には資料が少ないから何を言うにも説得力が足りないかと、自分の力不足を棚に上げて嘆く私に、先生は、「古代なんか、どの論者が用いる資料も、すべて同じものですかね」と穏やかにおっしゃり、なるほど、先生のご論文を拝読すると、こうした厳しい制約の中で、いわゆる実証的方法と理論的方法が美しい調和をもって一篇を織りなしていることが見てとれるのである。「偏りのなさ」は、視野の広さともつながる。先生のご研究は誠実で目配りが行き届き、決して一方的な見方をなさない。たとえば、万葉集でしばしば歌われる「草木をカザスこと」には、風雅の行為としての意味とともに伝統的タマフリ行為としての觀念があることを細やかに論じられ、「色に出づ」が、従来言われていたような、思いの顔色化、表情化という静止的な状態を意味するのではなく、「口に出す」「嘆く」「泣く」などのより能動状態を意味するという論において、それを成り立たせている恋愛ないし結婚の形態をあわせて考察される。多義的重層的な表現を論証する方法もまた、重層的で説得力に満ちているのである。

「文は人なり」と言うように、こうした先生のご研究はそのお人柄と分かちがたく結びついている。学生に対しても同僚に対しても、誠実な偏りのない姿勢で向き合って下さり、一方的に何かを押し付けることは絶対になさらない。広い視野をもって見守って下さり、だからこそ私たちは、すっかり安心して先生に甘えてきてしまったと思う。授業のやり方で悩んだ時、会議の進め方で迷った時、私はいつも先生の研究室に駆け込み、そのたびに助けていただいた。失敗をしでかした時は、さりげなく慰め励まして下さった。私たちはみな、自覚しているところでも、あるいは気づいていないところでも、先生にどれだけ支えていただいたことだろうか。

二〇一三年四月から文系学部今出川一校地化となり、国文学科および大学院国文学専攻のすべての学生が今出川にそろろう。また二〇一四年一月には国文学専攻設立六〇周年・国文学会創立五〇周年を迎えることになる。こうした大事な時期に先生がご退職されることは、私たちにとって本当に寂しく心細い限りであるが、これまで先生に教えていただいたことを十分に生かしていけるよう努力する所存である。

駒木先生、これからもどうぞ私たちを厳しくあたたくお導きください。先生のご健康とご多幸をお祈りし、つたないながら送る言葉といたします。

植木朝子